

## 序章 ムラびとの語りを紡ぐ

柳田國男は『故郷七十年』の「布川のこと」という文章の中で、間引きについて次のように述べている。「約二年間を過＊1した利根川べりの生活で、私の印象に最も強く残っているのは、あの河畔に地藏堂があり、誰が奉納したものであろうか、堂の正面右手に一枚の彩色された絵馬が掛かってあったことである。その凶柄は、産褥の女が鉢巻を締めて生まれたばかりの嬰兒を抑えているという悲惨なものであった。障子にその女の影絵が映り、それには角が生えている。その傍らに地藏様が立って泣いているというその意味を、私は子供心に理解し、寒いような心になったことを今も憶えている」――。

利根川べりの生活とは、長兄松岡鼎かえが医院を開業していた茨城県北相馬郡布川町（現利根町）で、柳田が一三、一四歳の二年間を過＊1した頃のことである。少年柳田の心に焼きつけられた間引絵馬は折にふれて柳田の内部で蘇生した。底知れぬ貧困とそれゆえの人間破壊を物語るこの恐怖の凶柄

が、日本民俗学の萌芽を促したことは確かであろう。

柳田が利根川べりでこの絵馬を見たのは明治二〇年（二八八七）か二一年（二八八八）のことで、その頃、長塚節は、そこから地続きの鬼怒川べりで八、九歳の少年として暮らしていたのだった。節は茨城県岡田郡国生村山前（現石下町国生）で豪農長塚源次郎の長男として生まれた。節の代表作となった『土』は明治四三年（一九一〇）六月一日から一月一七日まで『東京朝日新聞』に連載され、明治四五年（一九一二）五月春陽堂から単行本として出版された。この作品は当地の農民の暮らしや民俗世界を克明に描いたものとして注目される。

主人公勘次も妻のお品も小作農の貧しい暮らしに喘いでいた。おつぎという娘が一三の時、与吉が生まれた。そしてお品はまた身ごもる。おつぎを奉公に出してしまえば生まれてくる子の守や家の手伝いもさせられない。子は産めない——お品は墮胎を決行した。——挿入した酸漿はつすきの根によって軽微の傷を作り、そこから破傷風菌が入って、その結果お品は死に至ることになる。ここに描かれた墮胎こそ、救いたい貧困の象徴だった。

『土』に描かれた民俗世界を学ぶために石下町国生を訪れたのは、平成七年五月二八日のことだった。長塚節の生家は広い屋敷林に囲まれた大きな萱葺屋根の家だった。その節の生家の東隣も大きな屋敷だった。それは、長塚清太郎さん（大正七年生まれ）の家だった。清太郎さんからはこの地のような民俗を学んだ。清太郎さんの口からはお品が行ったような墮胎の話は聞けなかったが、当地で戦前まで行われていたという墮胎について聞くことができた。それは、桑の木の根から出る

白いヤニが墮胎に効くというものだった。

酸漿と墮胎については体験者から話を聞いたことがある。静岡県伊豆の国市大仁小字浮橋の古屋みつさん（大正元年生まれ）は九人の子供に恵まれた。その中のある子を身ごもった時のことである。すでに多くの子宝に恵まれていたので、暮らしむきは苦しかった。夫（明治四〇年生まれ）と相談の上、修善寺の病院に赴き、中絶を願い出た。しかし、医者は「こんな健康な体の人はいない。もつたないから産みなさい」と言って受けつけてくれなかった。女として、身ごもった子を生みたくない者がどこにあるう。父親として生まれて来る子に期待をかけない者がどこにしよう——日本の近代はこうした思いを踏みにじるところに立場を据えていたのである。家に帰って医者の言葉を夫に伝えると、夫は苦悶の末、田中山へ行つて酸漿の根を掘って持ち帰り、みつさんにこれを煎じて飲んでくれと呟いた。この地では酸漿の根は「子ハライ」の薬になると言い伝えられていた。「苦にがかった。あの苦さは忘れません——」とみつさんは語る。苦いのは酸漿の根の味ばかりではなかった。授かった命をこうまでして絶たねばならぬ苦さである。幸いにして、みつさんの健康な体は「子ハライ」の薬を受けつけることなく、みつさんは元気な女兒を出産した。

ところで、『土』には氏神桑原神社の秋祭りの一〇月一五日に瞽女こせが巡回してくること、そしてその瞽女が瞽女宿に泊まって芸や口寄せを行ったことが描かれている。長塚清太郎さんは、ムラを訪れ、瞽女宿に泊まった瞽女の実態を知る最後の世代である。以下は清太郎さんによる。

——国生には三人組の瞽女が七組巡回してきた。三人組は、娘（一八、一九歳・中年（三〇代）・

婆さん（六〇〜七〇歳）といった構成が普通で、娘が三人分の荷物を持った。荷物は風呂敷包みだった。婆さんが三味線を持ち、三味線を弾いた。中年の女は、門付した家々でひとつかみずつくれる米を入れる袋を持つ係だった。瞽女の服装は、袴あはせに帯、羽織を着、駒下駄履き、頭は「ゴゼッカブリ」と呼ばれる手拭かぶりである。門に立ち、三味線に合わせて唄を歌った。家人が五厘渡すと「隣じゃ一銭くれた。五厘じゃ無理だ」などとねだったりした。清太郎さんの知る時代では大体一組一銭と米ひとつかみだった。こうして七つの組が巡回してくるのだから、七銭と七つかみの米が必要だった。ムラ祭りには餅とは別に、どの家でも強飯ちかめ・ケンチン汁などを作ってあったので瞽女たちはそれも求めた。

瞽女宿をする家は「食べるのに骨が折れる家」とされた貧しい小作農家だったという。瞽女を泊めることによって、瞽女が門付で得た米や、若干の銭を宿賃として得て暮らしの足にしたのであった。国生で瞽女宿をする家は二軒で、七組の瞽女はその二軒に分宿した。

瞽女とムラびとの関係は、地方や時代によって異なっただけであるが、清太郎さんの語りから驚くべき実態を知らされた。清太郎さんは「瞽女の唄聞き歩くと嫁なんぞはもらえないからな」——と親たちから瞽女宿へ行くことを禁じられた。普通の人は瞽女宿へは行かなかった、という言葉葉に対してその説明を求めると、「二、三歳から三〇代になっても嫁のもらえない小作人の男たちが集まった」「瞽女は一〇銭で言うことを聞くとという話を聞いたことがあった」という説明が返ってきた。一部では、瞽女宿は、ムラの中にある社会経済的格差に起因した鬱屈や性的抑圧を解放

する場となっていたのである。もとより宵の口には、瞽女唄や口寄せが行われたのであるが、夜が更けると宿に泊まってゆく男たちがあったのである。

瞽女宿は、視力に障害を持つが故に他郷を巡り、芸を売って口を糊する者と、前近代的な社会構造の矛盾と痛手を背負わされた者同士が、生を確かめ合うという悲しい宿だったのである。瞽女宿に泊まる男たちのことをムラびとたちは「ゴゼスキ」と呼んだ。

清太郎さんは、親に注意されてはいたものの瞽女の語る唄の口説くどきと曲節くどきが好きだったので「こっそり、もぐるようにして瞽女宿へ行った」と語る。瞽女唄の歌い出しは、「へめでたや めでたや 今日国生のお祭りでお粗末ながら聞かせます……」だった。「聞かせます」というところが瞽女が単なる物乞いではなく、由緒ある語り手の系譜に属していることが感じられる。

『土』の冒頭にはお品がもらい風呂に行く場面が描かれているのだが、長塚清太郎家にも二〇軒の小作があったので、大正から昭和初年にかけては小作人たちがもらい風呂に来ていたという。晴天続きの折には一〇日に一度ほどだが、雨の日にもらい風呂に来ることが多く、雨の夜は人数が多かった。玄關を入ったところの土間に縁台が置いてあり、もらい風呂に来た人びとはそこで順番を待った。茶菓子・オカズ・手拭などを持って来る者もあり、そうした人びとはイロリのある部屋に入り、火に当たって家人と談笑しながら順番を待った。もらい風呂をする人びとの中にも階層があったようだという。

長野県飯田市上村下栗の小字半場は標高一〇〇〇メートルの地にある。以下は同地の野牧久言さ

ん（大正七年生まれ）の体験と伝承である。——家で使う水は井戸水ではなかった。飲料水・炊事用水は一六〇〇メートルほど奥の水見沢に求め、昭和一〇年までは水源まで水担ぎに出かけていた。天秤棒の前後に一斗入りの桶を吊って運び、四荷で風呂が一杯になった。しかし、平素の風呂水は水見沢から運ぶことなく、板葺屋根の時代、屋根からの雨水を使った。風呂水は茶色だった。小学生の頃から、下校後水見沢から飲料水を運んだ。昭和一一年以降竹筒埋設の古式水道を使うようになった。竹は淡竹の三、四年もの、鉄棒を使って節をぬいた。分岐点の接合には松材を使った。地下埋設をすれば、冬季の凍結や水汚れを免れることができた。竹水道の管理には常時三人が当たっていた。最盛期には半場三〇戸とそれ以遠の中根まで水見沢の水が竹筒で配水されていた。竹筒がエスロンパイプに変わったのは昭和三〇年のことだった。竹筒埋設以前、半場には風呂仲間があった。仲間組は最大一五戸に及んだこともある。当地には仲間風呂に紫蘇しその葉を入れる慣行があった。紫蘇の芳香によって汚れた感触や臭気を除き、爽快感を求めたのである。

静岡県賀茂郡南伊豆町吉田は山が海に迫っている入江のムラである。同地の飯田千代松さん（明治三年生まれ）から次のように聞いた。——七軒で一つの据え風呂を所有していた。これを持ち回りで沸かし、七戸の子供たちはすべて夕飯前に入れた。大人たちは、帰宅順に都合のよい者から入った。この習慣は昭和初年まで続いた。

倉本幸さんは明治四五年、福岡県山門郡両開村大字西開官有仮二番（現柳川市）で生まれた。当地は有明海の干拓地である。干拓地は常に燃料が乏しかった。よって風呂は昭和三〇年代まで共同

風呂だった。終焉期の燃料は石炭だったが、それ以前は長い間、当番が柳や藁などを苦勞して集めたのだった。当番は家中総出で午前中に水汲みをし、燃料を集めた。午後五時には風呂が沸いていなければならなかった。一番には隠居などが入り、スプロには働き手の夫婦がいつしよにやってきた。脱衣所は男女別々でも中は混浴だった。駐在が巡回してくる時だけ「セビ」という境板を滑車で降ろして風紀上問題がないことを装った。当番は九時までで、それ以後、若い衆が石炭を持って入りにくることもあった。

近代以降も人びとは入浴に苦勞してきた。それは経済格差ばかりではなく、自然環境に影響されるところもあった。

私が幼少年期を過ごしたのは静岡県牧之原市の農村だった。国民学校に入学した昭和一八年のことだった。小作農家某家の風呂を覗いたことがあった。その風呂はヘソ風呂と呼ばれるもので、桶の中に焚き釜が組みこまれたものだった。それは、狭い庭先に雨ざらしの状態で置かれていた。風呂桶の中を覗いてみると寒天か麩ふのようなものが濁った灰色の水に浮かんでおり、異様な臭いだった。垢の固まりである。子供心にもその衝撃は大きく、長く心に刻まれ、小作という言葉とその世界を象徴するものとして、放置するように置かれた風呂桶の中身が釘のように心に刺さった。

民俗を学ぶ旅を続けていると各地で小作・地主の関係を耳にすることがあった。昭和の時代はまだこれが生々しかったのでこの話題に及びにくかったのであるが、平成に入ってから地主制度にかかわる話題が次第に増え始めた。水田のない山中、耕地が少ない山中では山地主から山を借り、

地代を払って焼畑を行って食糧を得るという時代が長く続いた。高知県高岡郡檮原町大蔵谷の西村晴實さん（昭和五年生まれ）はその経験を持つ。当地では焼畑のことをキリハタ・ソバヤブなどと呼び、ヤマキビと呼ばれるトウモロコシや大豆・ソバ・ヤナギ（ミツマタ）などを栽培した。山を持たない家では山地主から山を借りてそこでキリハタをした。当地では作地代、年貢のことを「カジシ」（加地子）という古い伝統的な言葉で伝えていた。当地のカジシは収穫物の六割だった。六割を地主に収め、四割を小作が受け取った。穀物のみならずヤナギのような換金作物についても同様だった。それは苛酷なものだった。

静岡県浜松市天竜区佐久間町でも焼畑が盛んだった。以下は佐久間町相月の栗下伴治さん（明治二七年生まれ）による。当地では焼畑のことをヤマヅクリと呼んだ。ヤマヅクリでは稗・粟・大豆・ソバなどを栽培した。稗は一合蒔けば一〇俵収穫できることもあった。山のない家では山地主から山を借りてヤマヅクリをした。年貢のことを「ジシ」と呼んだ。「地子」とは『養老令』以来の古い言葉である。さらに注目すべきことに、この地に「ジシガケ」という言葉が伝わっており、伴治さんはそれを使った。ジシガケとは、山小作が借り受けた地でヤマヅクリの作物が稔ったところで地主と小作が、その作物の稔りの具合を見ながらその年のジシ（年貢）を決めることだという。当地では、ジシは普通収穫の二割とされていたが、それでもジシガケによってさらに少なくなることもあった。土佐山中に比べれば当地の焼畑地の年貢はかなり低いのであるが、それでも、伴治さんは貧乏人は困り、地主は太ったと語る。なお、戦後は「杉年貢」と称して、借りた焼畑地の跡を杉

の植林にしたり、杉山を皆伐出材し、その跡を焼畑地として借りたりした場合は、山に杉苗を植える手間賃を以って年貢に代えるという慣行が広く行われた。長野県飯田市の遠山谷では山地主と山小作の間で、「ハタレイ」（畑礼）、「ゴカンニチレイ」（五箇日礼）などと呼ばれる正月儀礼を行っていた。

長野県飯田市遠山谷の農業は焼畑・畑作が中心で稲作は稀少だった。少ない水田でも小作に田を貸す慣行はあったのだが、その年貢は特殊なものだった。飯田市南信濃八重河内の遠山常男さん（大正六年生まれ）は次のように語る。当地では、稲刈りの日に稲株の数を半々に分け、これを「刈り分け」と呼んだ。南信濃木沢上島の下平福義さん（大正七年生まれ）は、地主と小作の刈り分けは畝で分けたものだと言っている。

宮城県の大崎平野や関東平野で屋敷林について学んだことがあった。遠望して古社の社叢のような屋敷林を持つ家がかつての大地主の家だった。イグネ（屋敷林）もなく、カシグネ（檜の木の屋敷垣）もない家もあり、これらは小作だった家だと思われた。いくらかの垣やイグネのある家もあった。大崎平野で次のような話を聞いた。——冬季、吹雪から家を守るのにイグネは大きな力を果たした。イグネのない家では、防風・防雪のために萱（薄）または藁で簀を編み、それで母屋を囲んだ。これをヤドツと呼んだ。「宿簀」の意だと思われる。

刈った稲の乾燥法に稲杭を使う方法と使わない方法があった。稲杭とは杉の間伐材を長さ九尺に切ったもので、これを田に打ち込み、田床から尺五寸ほど上にヨコギッコ（尺二寸ほどの横木）を

結びつけてその上に稲束を井桁に積み重ねて乾燥させる。稲杭のない家では次のようにした。田の土を八寸×尺六寸×六寸のブロック状に掘り出し、まず中央に二段重ねる。そして、その四方にブロック一段ずつを置く。これが一基台のできあがりであり、これに対して四方から三把ずつの稲束を根方を外に、穂が二段重ねのブロックの上にくるように積む。こうして一五段重ねる。この方法をホンニヨトリと呼んだ。別に、田床に稲束を直接立てて干すソラダテ、またはジندگانと呼ぶ干し方もあった。稲の干し方にまで格差が生まれていたのである。

地主・自作農・小作農の格差と抑圧は暮らしの隅々まで翳りをもたらしていた。柳田國男の『日本農民史』を読むと、柳田が、いかにしたら小作農を減らし、自作農を増やすことができるかと苦悩していたことが知れる。<sup>\*4</sup>柳田のこの悩みは結果的に、第二次世界大戦後の農地改革（一九四六年一〇月、自作農創設特別措置法案・農地調整改革法案）によって解消されることになった。

交通手段が発達し、流通が多質・高速・大量化を果たしている現在でも山深いムラムラでは、人の移動や生活必需品の入手には多大な苦労がある。ましてや、交通手段、流通の未発達だった時代での苦渋は深かった。次に、二つの山中のムラのイエイエに巡回してきた商人・職人・その他の来訪者を列挙することにより、暮らしの変容の一部を探ってみたい。

①宮崎県東臼杵郡椎葉村竹の枝尾（標高六〇〇メートル）・中瀬守さん（昭和四年生まれ）。

⑦桶屋 ①鍋ふたぎ（鑄掛屋） ②傘張り（洋傘直し） ③反物屋（呉服屋） ④古着屋（中国人・エキン爺） ⑤塩魚屋（a塩鯖 b塩鰯 c塩鯨 d皮鯨） ⑥乾物屋（a干鱈 b海藻） ⑦篩屋（a

米籠 ⑧稗籠） ⑨箕屋（鹿児島から） ⑩薬屋（a富山 b奈良 c肥後Ⅱ膏薬・赤玉） ⑪石臼目立て ⑫園掘り（畑地造成Ⅱ野掘り鋏・三つ鋏・斧・鉈・引きモッコ・シヨウケなどを持って五ヶ瀬町からやってきて半年ほど泊まりこんだ） ⑬田掘り（石垣づくりのうまい職人が球磨からやってきて田を拓いた。一升瓶に水を入れて水平をとっていた） ⑭筑前琵琶法師（子供の頃、巡回してきて琵琶を弾き、家の浄めをした） ⑮胡弓弾き——。巡回来訪者はおのおのに泊まる家が決まっていた。中瀬家には毎年巡ってくる桶屋が一週間泊まり込んで桶の修理や製作にあたっていた。

②長野県飯田市南信濃八重河内小字谷峰（標高八〇〇メートル）・山崎今朝光さん（大正一一年生まれ）。

⑦衣類（反物） ①魚屋（a塩鰯 b塩秋刀魚 c身欠鯨） ②鯨屋（コマギレにした干鯨を目方で売り買いた） ③薬屋（a富山 b滋賀 c飯田） ④時計屋（南信濃地区の中心地和田のマチに時計屋が二軒あったが、豊橋の時計屋が巡回してきて柱時計に油を注し、修理などをした。時計屋は山崎家に泊まって八重河内の各戸を巡回した） ⑤鑄掛屋 ⑥鍛冶屋（和田のマチに鍛冶屋が三軒あったが、谷峰には世間の鍛冶屋が巡回してきた。そして、刃先の磨耗したトングワ〔唐鋏〕・鋏・イセングワ〔又鋏〕などの鉄の部分を持ち帰り、先掛け〔鋼入れ〕をした後、それを届けて代金を受けていった） ⑦洋傘直し（巡回してきてその場で直して帰った） ⑧三河万歳（正月に巡ってきて、大夫と才蔵が掛け合いをして帰った） ⑨俵ころがし（「へ大黒様という人は 一に俵をふんまえて 二でにっこり笑って 三で盃上手に持って 四つ世の中よいように 五ついつものごとくに……」と数え唄を歌いながら、その歌に合わせて、縄の先につけた俵を家の中に転がし込んで手元に引くといった動作をくり返す。

前回祝儀をはずんだ家や、祝儀を多く出しそうな家で、俵が縄から切れて離れるようにあらかじめ仕組んでおくのではないかと言われていた) ㊿兎買い(和田の人が飼う兎を買いに回ってきた) ㊻鶏買い ㊼コンニャク買い(コンニャク芋を買いにきた) ㊽椎茸買い(静岡県の水窪や和田から来た)

㊾胡桃買い(和田のマチには核から身をぬくことを専門にする胡桃ヌキ屋が十数軒あり、その人びとが胡桃の実を買い集めにきた) ㊿馬喰(今朝光さんの父は馬喰、祖父は伯楽(馬医)だった。馬喰は、馬を飼う家を定期的に巡回した。伯楽も折々馬を飼っている家から呼ばれた) ㊻桶屋 ㊼籠屋 ㊽石臼目立屋――。

右に宮崎県(①)、長野県(②)の二軒を訪ねた巡回商人や巡りくる職人などの来訪者を列挙した。これを詳細に検討してゆくと日本近代の様々な暮らしの襲や暮らしの変化、ムラの外部や産業との運動が浮上してくる。①では塩鯨と皮鯨、②では鯨屋が登場する。宮崎県椎葉村における鯨の食法を紹介してみよう。――㊿皮鯨は、タケノコが出る季節に行商人が持ってきた。四寸角で一尺ほどに切られていた。一寸角に切ってナマのタケノコとともに味噌で煮た。種蒔きの時期の体力をつけるのによかった(向山日当・甲斐馨さん・大正五年生まれ)。①皮鯨は真竹・淡竹のタケノコと煮るとタケノコがやわらかくなってうまい。タケノコの時期には、皮鯨と麦でムツケー(麦粥)を煮た。冬には丸トウキビと皮鯨でトウキビ汁を作った。体が温まってくまかった。また別に、酢味噌にしてもうまかった(戸屋の尾・那須芳蔵さん・昭和四年生まれ)。㊿椎葉村に入った鯨には三種類があった。その一つは塩漬けの皮鯨で砥石のような形状をしていた。真竹・虎攢竹(ホテイチク)・淡竹の

タケノコと煮しめにした。鯨はタケノコとよく合った。他に塩蔵の身鯨があり、いま一つはハナ鯨と呼ばれる脂肪だった。ハナ鯨は酢味噌和えにした(竹の枝尾・中瀬守さん・昭和四年生まれ)。㊿皮鯨売りの行商人が、砥石状の皮鯨を売りに来た。蓋つきの角籠に入れ、吊って保存、必要なだけ切って使った。タケノコ・馬鈴薯・芋ガラと皮鯨で煮つけにした。また、トウキビと麦を同量にして皮鯨を入れてムツケー(麦粥)も作った。肉・魚を食べるときには平素の箸とは別に、カシ・薄・麻ガラなどでそのつど箸を作って食べた。皮鯨の時にもそうした(古枝尾・那須登さん・昭和四年生まれ)。

①椎葉村へは主として塩漬けの皮鯨が入ったのに対して、②飯田市南信濃に入ったものはコマ切れの干し鯨だった。ここでは、二度イモと呼ばれる馬鈴薯と鯨肉を煮つけて食べるのが一般的だった。鯨の肉は流通条件の悪い奥深い山中のムラムラにまで運ばれていたのである。しかし、こうした流通は古式捕鯨の時代には考えられないことだった。明治中期になってノルウェー式銃殺捕鯨が行われるようになり、徐々に鯨肉が流通し始めるのであるが、国の隅々まで皮鯨や干し鯨が流通するようになるのは母船船団式捕鯨が始まる一九三〇年代を待たねばならなかった。山襲のムラムラの鯨食、そこまでに至る鯨肉の流通は近代捕鯨の発達と連動していたのである。

近代の社会生活・経済活動・公的組織に不可欠なものの一つに時計があった。学校・軍隊・鉄道・工場、それらのどこでもすべて時間を定めての行動が求められた。『岩波日本史辞典』の「時計」の項には次の記述がある。「維新後の時計国産は、一八八〇年頃から気運が起り、日清戦争後

に名古屋を中心として四〇程度の製造所を数えたが、市場の成熟を待たずに消えていったものも多い。東京の精工舎は九二年の創立、掛時計に加え、九五年には懐中時計、一九〇〇年からは目覚し時計を製造、販売（後略）——。ここに見える掛時計は柱時計のことである。柱時計は徐々に全国の家庭に普及した。明治三十一年（一八九八）に著された国木田独歩の『忘れえぬ人々』の中に「柱時計がゆるやかに八時を打った。」という文がある。<sup>\*</sup>昭和十二年（一九三七）六月にはキングレコードから富原薫作詞の「早起き時計」が発売されている。<sup>\*</sup>

ちつくたつく ちつくたつく ぼーんぼん おはよう おはよう 夜があけた きれいな朝だ  
よ とびおきろ 時計がなってる よんでいる ちつくたつく ちつくたつく ぼーんぼん

この時計は柱時計であり、この時期には柱時計が広域に及んでいたことがわかる。柱時計の動力は、薄い鋼を渦巻状に巻きこんでその発条力を利用するゼンマイである。ゼンマイは一定期間でネジを巻かなければならなかった。これにはイエイエの男や、高学年の男子が当たった。しかし、柱時計を正しく長期間使うためには機械に注油したり、機械を調整する必要があった。そこで、先に②長野県飯田市南信濃八重河内谷峰の山崎家の例で紹介したような時計屋の巡回慣行が生まれたのだった。

私が初めて時計屋の巡回について聞いたのは平成一五年、静岡県浜松市天竜区春野町川上の富田英男さん（大正七年生まれ）からライフヒストリーの聞きとりをしているときだった。富田家には、二俣（現浜松市天竜区、旧天竜市）から時計屋が年に一度油注しに回ってきた、と聞いた。幼い頃から柱時計の時報の響きになじんでいたはずなのに、これを聞いた時には妙な驚きを感じた。いつの間にか暮らしの中から柱時計が姿を消し、壁面には時報を告げることのない電子時計が座を占めるようになっていたのである。「巡回職人」という概念を意識化し、話題にすることによって時計屋の巡回が浮上してきたのである。われわれの身のまわりではこうして、じつに様々な物や慣行が意識化されないうちに変容し、気づかないうちに消えてゆくのである。それらの中には、喪失してはいけないものも数多く混在しているのである。

来訪者の中には門付芸人もあった。①椎葉村の筑前琵琶法師・胡弓弾き、②飯田市南信濃の三河万歳・俵ころがしなどがそれぞれである。浄めや祝儀といった信仰要素を含むものも多い。冒頭部で紹介した瞽女も門付芸人ではあるが、群馬県には越後から来た瞽女が歌う瞽女唄を蚕に聞かせると繭が豊作になると伝える地もあった。長野県の飯田市近郊では越後から巡回してくる瞽女のことを「ゴゼンサマ」と呼びならわしてきた。伊勢神楽や、青森から岩手へかけてのエンブリ（農耕予祝で、名称は水田の土をならす柄振えがらに由来する）の巡回にも信仰要素がある。鹿兒島県指宿市池田飯屋の吉永隆巳さん（大正八年生まれ）から「ザッチュードン」という不思議な巡回門付びとの話を聞いたことがあった。ザッチュードンはモグラ退治の呪力を持つ人で、袋を担ぎ杖をつけて巡回してきた。杖で地面を叩く呪的儀礼を行い、謝礼として米を受け、それを袋に入れて立ち去ったという。ザッ



チュードンという呼称は、「ザトウドン」（座頭殿）の転訛である。目の不自由な座頭どんは、杖をセンサーとしてすべてを知る。地下に棲み、作物を荒らしたり、田の畔に穴をあけて漏水をさそうモグラの動静も感知できる——杖の呪力によってモグラを鎮めることができると考えられていたのである。

時計屋の巡回について語ってくれた浜松市天竜区春野町の富田英男さんから、珍しい来訪者、風水師についても聞いた。ある時富田家に風水師が巡回してきた。父の正平（明治一八年生まれ）は風水に関心を持っていたのでその風水師を家に五泊させ、母屋の風水判定図を書いてもらった。その図は今でも富田家に保存されている。

長野県飯田市立石の佐々木要蔵さん（大正七年生まれ）は木曾ッ子（木曾種）と伊那ッ子（木曾系馬）を一頭ずつ飼っていたことがある。自動車・耕耘機前の話である。駄送をするには荷鞍をつけなければならぬ。鞍は「鞍師」という専門の職人が作った。要蔵さんはその鞍師について次のように語っていた。——銀蔵さんという鞍師が毎年根羽村からやってきた。鞍は鞍橋という木の骨組に藁で肉づけをして外側に木綿の厚布をかぶせて作るのであるが、使い続けると布が破れたり、藁のバランスが崩れたりしてくる。鞍師はそれを修繕するのであるが、その鞍の修繕のことを「鞍包み」と言った。鞍を包み直すからである。その際、馬の体と鞍を合わせ、鞍擦れのする「アタリ」と称する箇所を藁を抜いて調節した。銀蔵さんは毎年二晩泊まって鞍の修繕をした。銀蔵さんは鞍修繕のほかには馬の面綱おもづなも作った。麻を芯にしてピロウドを巻き、金具をつけた。面綱は当歳馬（その年

に生まれた馬）からつけた。銀蔵さんは風呂に入らない人だった。寒中でも水をかぶっていた。

僻陬へきすうの山中のムラムラを巡る商人や職人がムラの民家に泊まるのは常だった。①椎葉村の中瀬家には桶屋が一週間泊まったり、②飯田市南信濃の山崎家には豊橋の時計屋が泊まり、そこをベースにしてムラ中を回った。風水師が泊まり込んだ例も紹介した。鞍師の泊まった飯田市立石は僻陬ではなく中山間地であるが、ここでも民泊が見られた。

社会通念としては山のムラムラは閉鎖的だと思われがちなのだが、実際には開放的で外来者は歓迎された。外来の訪れびとの力を得ることによって暮らしが成り立つという側面があったのだ。新聞・雑誌も奥深い山のムラに届かない時代があった。ラジオもテレビも普及は遅れがちだった。新聞・ラジオ以前——僻遠の家に暮らす人びとは常に世間の動向、情報に飢え、強くそれを求めた。来訪者、巡りくる旅人は世間の動向、流行、情報を持ち来たってくれる伝達者だった。訪れびとを歓待し、心を開いて人を迎えるのは長い間に培われ、伝承された山びとの心であり、生き方だった。この、人に対するぬくもりのある眼ざし、人をなつかしむ心は現代人、都市民が希薄化させているものである。

流通システム・交通が発達した現在、ITの発達・普及により瞬時にして大量の情報を手にすることもできる。こうした至便の時代にあつて、山深いムラムラは、過疎化・高齢化の波にさらされている。山地のムラムラは豊かな自然と直接的に接し続けてきた先端の地である。そこは日本文化の多様性の一極を担ってきた地である。その衰退を座視するわけにはゆかない。

一般的には、明治維新から太平洋戦争終結の昭和二〇年（一九四五）の間が近代だとされている。これに異を唱えるわけではないが、昭和三〇年（一九五五）から昭和四八年（一九七三）にかけての高度経済成長期の様々な社会変容に注目しなければならない。産業構造・イエと家庭・生活様式などが激変し、価値観の変化、民俗の衰退が顕著になった。ここでは、こうした高度経済成長期をも含めて変容と記憶を追ったものが多い。記録し、紡ぐべき変容の壁はあまりに多く、ここでとりあげたものはその中のごく一部に過ぎない。

記憶は反芻によって褪色と忘却を免れ、語ることによって共有化される。そして、記憶は記録されることによって省察と建設の活光源となる。視覚的な記憶、観察結果も映像として記録されない限り、記憶の中にかとどまることができず、くり返し想起しないと消え去ってしまう。しかし、映像記録が不可能でもその一部を文字化することはできる。

本書はⅡ部の「イロリとその民俗の消滅」に多くの紙幅を割いている。イロリという設備は、単なる固定的な一つの物ではないし、その機能も多岐に及んだ。様々な付属設備や関連用具を伴い、多くの慣行を発生・伝承させてきた。イロリが纏ってきた民俗の総体は多彩でふくらみがあった。おのおのの緒をたどってゆけば、煮沸や採光・暖房の変遷・住まいの歴史・家族のありよう・心のありよう・生業や暮らしにかかわる様々な貯蔵物や食物などが浮上してくる。太平洋戦争の終末から高度経済成長期にかけてイロリは姿を消していった。イロリという設備の消滅はじつに多くのものを道づねにしていたのである。そうしたイロリの記憶をなるべく細かく記しておきたかった。

- 1——柳田國男『故郷七十年』初出一九五九年（『柳田國男全集』21・筑摩書房・一九九七年）。
- 2——長塚節『土』初出一九二二年（岩波文庫・一九七〇年）。
- 3——野本寛一『民俗のことばで探る——遠山谷の環境と暮らし』（伊那民研叢書3・柳田國男記念伊那民俗研究所・二〇一八年）。
- 4——柳田國男『日本農民史』初出一九三七年（『柳田國男全集』3・筑摩書房・一九九七年）。
- 5——永原慶二監修『岩波日本史辞典』（岩波書店・一九九九年）。
- 6——國木田獨歩『忘れえぬ人々』初出一八九八年（現代日本文学大系11『國木田獨歩・田山花袋集』筑摩書房・一九七〇年）。
- 7——与田準一編『日本童謡集』（岩波文庫・一九五七年）。